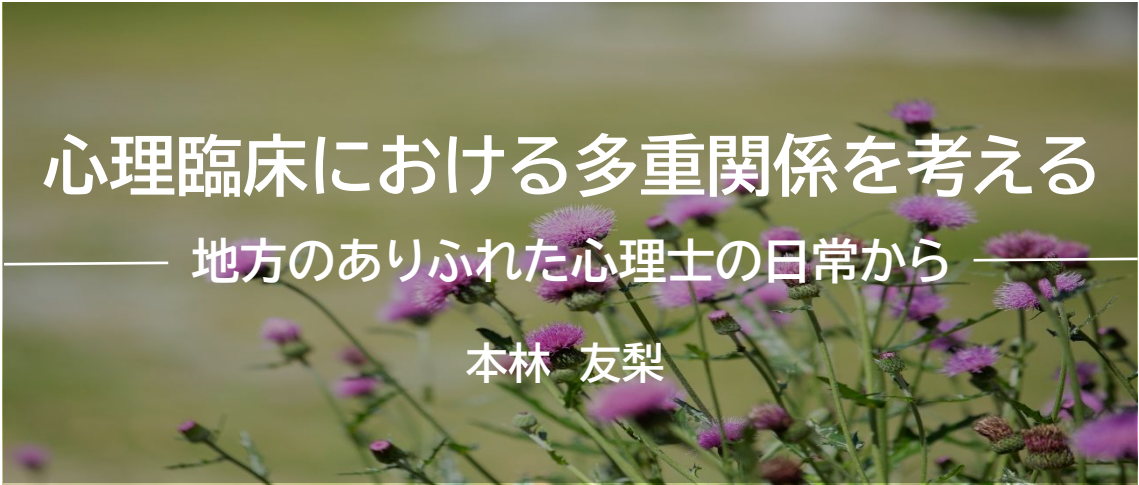




心理臨床における多重関係を考える

地方のありふれた心理士の日常から

本林 友梨

勉強会で・・・

本稿で4回目の執筆となる。少ない回数であるが、1回目を執筆していた「私」より心理臨床における多重関係についての感じ方がかなり変化した「私」を実感する。執筆するために知識習得に努力したり（執筆がなくてもしなければならないが、私にはそれがなかなか難しいのである！）、得た知識と日々経験する多重関係的な出来事を繋げていくためにあれこれと考えたり…そうした中で、少し前の「私」よりもやや視野広く、また、感じられ方も豊かになったのだと思う。前回の冒頭で、職場外の対人援助職者の方が旧友であったことを嬉しく思うということを書いたが、そう感じられたこと、そしてそれをこの連載原稿に素直に書けたことが、その証だと考える。私の中で怖い存在としか捉えることができなかった多重関係であるが、今はまた違った感覚として捉えることができている。

さて、とはいっても私にとっては最大の関心事である心理臨床における多重関係であるが、そもそもなぜ私はこうも多重関係

が気になるのかということを考えたい。きっかけは、私が参加している心理士（以下CP）が集まるある勉強会でのことである。先日、そこで私の関心事（多重関係）についてお話したのだが、「フィールドワーカーは、そこまで多重関係を気にしなさそうだけど」という率直な意見を頂いた（『そこまで思いつめなくても大丈夫ですよ』と私を励ます感じもあり、優しさを感じました）。私は修士研究において、フィールドワークを行っており、その経験と私の関心事の間に繋がりが見えにくいとのことであった。

このご指摘を頂いた際、なぜ私がここまで多重関係に関心を寄せるのか上手く説明することはできなかった（し、前述したように励ましのお言葉とも感じたので、説明を求められていないと捉え、ご指摘を受け入れて終わったという感じになった）。しかし、こう言われると気になってしまう。心理臨床を行う中で様々な悩みや困難を感じている私であるが、その中で、なぜ最も多重関係に関心を寄せるのであろうか？研究以前の問題であるかもしれないが、心理臨床の多

重関係を理解していくことのヒントになる可能性もあると考える。

なぜ、私は多重関係に関心を向けるのか

修士研究では、フィールドワークの手法を用いて、介護予防の文脈で開始された高齢者グループ(サロン)の活動維持要因を探究した。フィールドワーク初回、その場に参加の方が、外者の私を輪の中にすぐさま入れてくださった。そこに居ることが当たり前のように、私を居させてくれた。このような場の特徴があり、私はサロンに参加者として参加させていただき、サロンメンバーにも話しかけることをするなど、「積極的な参加者(active Participation)」(箕浦, 1999)としての役割を担うこととなった。自分という存在がその場に影響することを認めつつ、研究に取り組んだ。その場で起こる様々な事柄は「私」を抜きには成立しない、つまり、その場と「私」の相互作用があってその事柄が生じることとなる。参加者の方は、「私」という本来サロンの外者である「私」の存在を認め、さらにサロンの中に含み、ともに過ごすことを許してくれた。心理臨床の本来(基本、理想)はクライアント(以下CI)―CPという一つの関係(役割)の中で展開すべきものであるが、多重関係が伴うとCI―CP以外の関係以外の関係が展開の中に入り込む。本来の心理臨床になくてよい関係が実践に含まれる(影響する)こととなるが、サロンの中に入らせていただいた「私」であるのに、心理臨床になるとそのことについてなぜこんなにも気にするのだろうか。勉強会でいただいたご指摘はもっともである。サロンの方々が許してくれたように、なぜ私はCI―CP以外の関係を許せな

いのか。

それは心理臨床の基本がそうであることは最もであるし(経験を積み、つまり心理士としての力量が増してくれば薄まるところかもしれないが)、フィールドワーカーの視点からすると、外者の「私」であるからこそ、「私」が与える影響についてとても慎重に考えることを求められたからであろう。フィールドワークの経験から、振舞や醸し出す雰囲気など「私」という存在が他者にどれだけ影響を与えうるかを学んだ。この学びは現在の自身の臨床スタイルに繋がっている。

あとは、前述した“心理臨床の基本がそうであること”と関連することであり、これまでの論考でも述べている通り、CIとの間で多重関係を体験することによって感じる心理臨床の難しさと、それに伴う苦しさを私は感じていることが挙げられる。だがしかし、難しさと苦しさを抱えているだけでは耐え切れず、『どうにかしなければ…!』と思うほど、私はそれらの何に苦しめられているのであろうか?

「風土臨床」と私の苦しみ

『風土臨床：沖縄との関わりから見えてきたもの―心理臨床の新しい地平を目指して』(青木ほか, 2006)という本がある。心理臨床家が沖縄のカミンチュウ(神事に関わる職能者)との出会いの中で学び体験したことをもとに「風土臨床」というアイデアを提唱し、それについて各々の心理臨床家が「風土臨床」ということを論考している。「風土臨床」の「風土」という捉え方はそれぞれの臨床家によって微妙に異なる(「風土」というものを臨床家がどう扱っていくかという

視点については逆の考え方もあるようである) ようだが、「風土臨床」とは自己を含む関係概念として「風土」という言葉を使い、その「風土」のなかで行う心理臨床と、心理臨床を成立させる「風土」の調えも同様に捉えていくような実践的な活動・研究のこと(青木, 2006)である。心理臨床における多重関係が生じやすいことに苦しみ、つまり少なくとも臨床地域の性質というものに手を焼いている私にとって、この文献に収められている先生方の論考は大いに刺激的で、大変感銘を受ける内容となった。私の苦しみについて、この「風土臨床」のアイデアを通して考えてみたい。

第2章第2節「からだと風土」を執筆した橋本朋広氏は、カミンチュウと共に参加した祭りの体験を通して「からだ」に注目するようになり、「からだ」について深めていくことで都市の生活と沖縄の生活の感覚の違いなどを通し「風土臨床」について述べている。哲学者の市川が主体によって生きられるからだを「身」とし、単なる客体としての「肉体」と区別したことになぞられ、「身」となるからだを「透明な身」と呼んだ。祭りで体験した自然との関わりのなかで形作られたからだは「透明な身」であり、集合的な歴史的な身、共同体によって生きられた歴史的な身であるとした。沖縄でその場に応じた「透明な身」を生きた橋本は自身の生活地域に戻るわけであるが、当然の事であるが、沖縄の「透明な身」を生きることができず、また生活地域の「透明な身」を生きることにも抵抗することとなり、疲労が溜まったと記している。私が多重関係に苦しみことも同じようなことではないだろうか? 週末、その地域の一人の生活者として「透明な

身」を生きている。家族の中で振舞うべき態度で生きている。そのリズムに乗っている。しかし、CIとの突然の遭遇(例: スーパーで会う)で、急にCPとして「透明な身」を生きなくてはならなくなる瞬間が訪れる。でも、私は器用にそれができない。しんどさに変わる(家族の中での「私」もCPとしての「私」も紛れもなく「私」自身であり、それが表面的にも一致していればよいのであるが、なかなかそうもいかない)。橋本は「透明な身がどのようなものであれ、その場で構成される透明な身から身を引き離そうとすると、「わたし」や体は拠り所を喪失し、孤立し、閉塞してしまう」と述べる。私が感じているしんどさには、まさしく、孤立感や閉塞感が含まれているように思う。

結論として、一見対立して捉えられる物事であっても、それらの特徴を見抜き、それらを繋げていくことが重要だとした。CPとしての私/生活者としての私を分裂したり、排除したりして、どちらかに閉じこもるのではなく、相互に働きかけることが大切であると理解する。

修士研究においてサロンの参加者が私を中に入れてくれたように、外者の私に働きかけてくれたように(このようなサロンの「風土」がまさしく活動維持要因であったのだ!)、私も習ってきた事柄だけを正しいものと捉えるのではなく、それ以外の事柄に関しても視野を広げ取り入れ、適切に扱えるようになる努力をしなくてはならない。

(また、橋本の考えに沿うと、心理臨床の基本的なルールが適応できなさそうな難しい環境(地域性)がある時に、心理臨床の基本的なルールだけを忠実に守っていくことは、CPとしての私が居心地のいい場所に閉じ

こもるといふ結果になる危険性もあるといえる。)

第3章第1節「風土臨床の態度と実践」を執筆した青木真理氏は、個人の生は自然と繋がり成立するものであり、自然を世話することで自然だけでなく人や共同体について理解していくことが可能となるとした。また、そのような人や共同体が相互循環している状態が健康や豊かさに繋がると述べ、自然(地域)と分裂するのではなく、寄り添いながら生きることの重要性を示した。つまり、心理臨床の文脈において考えると、その地域に関心を持ち、意識し、世話(ケア)することがCPにも大事だということだとも理解できる。また青木は、共同体の中で生活を営みながら自然を世話していくことなどと里山の成立に似通う点があると述べる。里山は「人の手が入ってこそ、人間以外の生き物の営みが維持される」空間であり、自然と人(人工的な要素)がちょうどいいバランスで保たれているという。私の心理臨床においても、臨床地域という自然的なところと、習ってきた心理臨床の基礎(自然のものではないもの、自然の外にあるものというイメージ)がちょうどいいバランスで居ることができる地点を探していくことが重要だと理解する。これまでは、習ってきた心理臨床の基礎に沿って臨床を行っていきたいという思いと、それを上手く活用していくことができない現実とを、それぞれ認めつつも、相互に繋げて捉えていくようなことはしていなかったと思う。繋げて捉えていく作業は容易なことではないと感じるが、繋げていくという発想自体が私の中になかったことが、私が強いしんどさを抱くことに影響していたのではないかと考える。青

山は、里山成立時の自然と人がちょうどいいバランスであるような時に創出される風土を“よい”臨床的風土とし、そこで行われる創造的・治療的行為を「風土臨床」とする。私が目指すべき心理臨床は、「風土臨床」であるのかと思う。

地域に生きる心理臨床家を目指して

心理臨床における多重関係について、なぜ私はこんなにも苦しんでいるのか。本論では風土臨床というアイデアを通して考えてき、言われてみれば当たり前だと思えるような結論となった感覚もあるが、私の中ではとてもすっきりした気持ちが生じている。それはおそらく、自然(地域)に寄り添うことの重要性や必要さを強く感じる事ができたからだと考える。これまでは、地域に寄り添っていくことは必要ではあると感じていたものの、そうすることは本当に心理臨床に有効に働くのであろうかとかいうことを考え、自信を持てずにいた。しかし、風土臨床というアイデアは、自然(地域)と人などその他様々なものを繋げていくことを重要とするものであった。臨床地域に住み、その中で心理臨床家として生きていくうえでの明確な方針を得られたように感じる。

箕浦康子(編). (1999). フィールドワークの技法と実際——マイクロ・エスノグラフィー入門—— ミネルヴァ書房

青木真理(編). (2006). 風土臨床——沖縄との関わりから見えて来たもの 心理臨床の新しい地平を目指して—— コスモス・ライブラリー
